

美術専攻 日本画研究領域

リ タン

李 丹



流るる図

岩絵具、墨、銀箔、雲肌麻紙、絹本

## 流るる図

### 「自己愛」とカラスを主題とした造形的探究

本研究は、「自己愛」を造形表現において可視化することを目的とした。ここでは「自己愛」を、自己中心的情緒ではなく、内的意識と外界との相互作用により形成され、バランスを保つ心理構造とする。自己の内面の構造を視覚的に再構築するためにモチーフ、素材および技法、そして、心理的概念相互作用を検討した。

まず、「自己愛」を投影するモチーフとしてカラスを選択した。カラスは都市と自然の境界を自由に往来し、孤独と共生という二面性を併せ持つ。その行動特性は、自己愛の揺らぎや成長過程と象徴的に呼応する。これまでの自身の制作においてもカラスを媒介として、心理的变化や自己理解の深化を視覚化する役割を担わせた。また、生活の中で生まれた記憶を投影するモチーフとして器物や植物を選んだ。これらは個人的な経験や日常の断片を内包する媒体であり、見る人の心に時間や感情の層を呼び起こす。日常の何気ない気づきにより義務や責任から解き放たれて行う自由な行動は、自己像や感情の輪郭を浮かび上がらせる契機となる。

次に、素材および技法について述べる。支持体には雲肌麻紙や絹を用い、水分や粒子の粗さを調整し、墨の滲みや流動を制御、偶発的表現を取り入れた。さらに、絹の画面を直接焼き、その上から茶染めした媒体を用いることで、素材の物理的・時間的特性の可視化を試みた。以上、カラスのモチーフ、素材の記憶について述べた。それらに「自己愛」という心理テーマを統合することは、自己の内面の動きと外界との関係を可視化する体系として成立する。この造形プロセスを通じて、自己理解の深化が促され、日常の中に潜む新たな認識や精神的風景への気づきをもたらされる。

総じて、本研究における「自己愛」は、造形化の過程で内面を守る固定的な感情としてではなく、外界との応答によって変化する開かれた意識として捉え直された。その結果自己像は硬さを失い、揺らぎを受容する柔軟な在り方へと変化したと言える